王政復古体制

1. 王政復古
2. 王政復古体制
3. アメリカ=スペイン戦争の敗北
4. アルフォンソ13世の親政
5. 1910年代・20年代の経済発展
6. 王政復古体制の危機
7. プリモ・デ・リベーラの独裁
8. 独裁の崩壊と王政の廃止

1．王政復古

- カノバス・デル・カスティーリョの構想
- アルフォンソ12世（在位1874～85年）
  - 憲法制定による王政の安定化
  - 第3次カルリスタ戦争の終結
  - キューバ十年戦争の終結
- **1876年憲法**――国王と国民による主権の分有、二院制、カトリック国教化（個々人の信教の自由）
- 1878年、サンホンの和約――十年戦争を終わらす。
- 1880年5月、合同党（1885年に自由党に改称）
  - 保守・自由の二大政党
- 1885年11月、国王の病死
  - マリア・クリスティーナの摂政
  - 自由党政権（～90年7月）

――結社法、民法、陪審制、男子普通選挙制

2. 王政復古体制

- 保守・自由の二大政党による政権交代
- 軍隊の政治への介入を防ぐ。
- カシキスモ caciquismo による選挙操作
  - カシーケ cacique（市町村の政治的ボス）
  - 地元への便宜供与、見返りとしての特定候補への投票
  - 前提としての大量の棄権、高い棄権率
- 反体制の諸政党

- 工業化・都市化の進展、多様な利害関係が生まれる。
  - 反体制勢力による民衆動員はいまだ存在せず。

    ——→1910年頃まではカシキスモは有効に機能した。

表6－1　下院における議席　(%)

	選挙年	保守党(A)	自由党(B)	二大政党合計(C)
男子普通選挙	1876	85.2	8.2	93.4
制限選挙	1879	74.7	16.1	90.8
	1881	9.9	75.8	85.7
	1884	81.1	17.1	98.2
	1886	17.1	73.5	90.6
男子普通選挙	1891	65.7	20.8	86.5
	1893	15.3	70.3	85.5
	1896	69.6	21.9	91.5
	1898	20.9	66.3	87.3
	1899	58.7	30.3	89.1
	1901	21.7	61.1	82.8
	1903	59.6	25.3	84.9
	1905	30.2	56.7	86.9
	1907	62.4	19.3	81.7

(注)　四捨五入のため，A＋B＝Cとはならない。アンダーラインが選挙時の政権党。

(出所)　M. Martínez Cuadrado, *La burguesía conservadora (1874-1931)*, Madrid, 1973, p. 39, p. 72 を補正。

3. アメリカ=スペイン戦争の敗北

- 世界が帝国主義段階に入る。
  →各国の保護主義、植民地獲得競争
- スペインも保護主義政策を採用
  - 1891年、フィゲロラ関税を完全に廃棄、高関税率の設定。
- スペインは、既得植民地の防衛に専念
  - 1895年、キューバで反乱、「キューバ共和国憲法」。
  （1897年8月、カノバスはイタリア人アナーキストに暗殺される。）
  - 合衆国のキューバ問題への介入
    ※合衆国はキューバの輸出する砂糖の90%を輸入、キューバの砂糖産業への投資を活発化。
  - フィリピンでも独立運動が起こる。
- 1898年2月、合衆国戦艦メイン号爆沈事件
- 4月、**米西戦争**が始まる。
  →スペイン軍は全戦線で完敗する。
- 12月、パリ講和条約
  →キューバの独立、プエルト・リコ、グアム、フィリピンを合衆国に譲渡

- 1898年の敗北の結果
  - 知識人への強い衝撃
    ※ウナムーノ、ガニベーなどの「九八年世代」
    「スペインの本質とは何か」
  - 政治の刷新（レヘネラシオン）を要求する動き
    ※ホアキン・コスタらの国民同盟
  - 1899年、シルベーラ政権による国家財政再建
  - 植民地からの資本の還流
  - 民衆の反響の弱さ
- スペイン・ナショナリズムの脆弱さの露呈
  →地域ナショナリズムの台頭（カタルーニャやバスク地方）
    ※カタルーニャの「カタルーニャ地域主義連盟Lliga」
    （1901年設立）

4. アルフォンソ13世の親政

- 1902年、16歳となったアルフォンソの親政開始（～1931年）
  ※国王の政治への介入

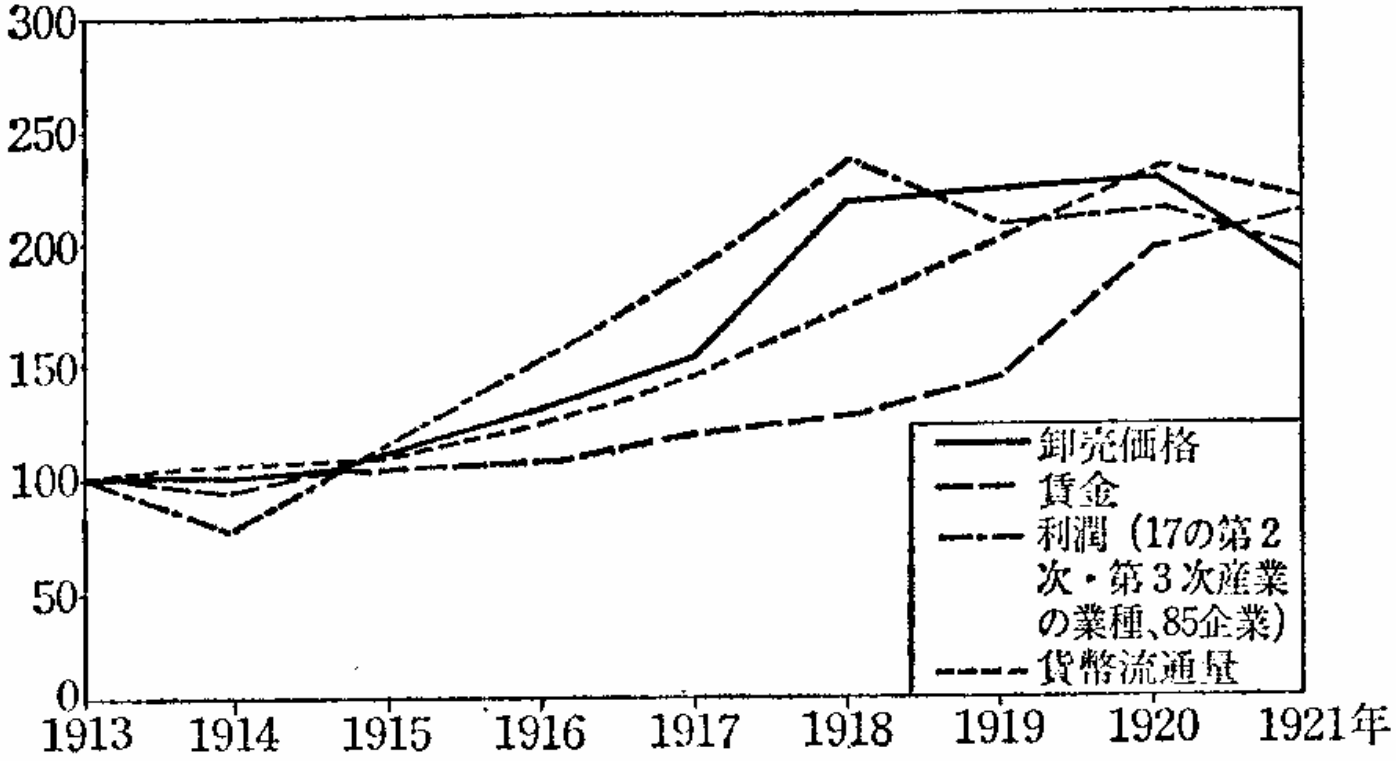
- 1907～1909年、マウラ長期政権
  - 「上からの改革」を試みる。
    ※1907年選挙法
  - その権威主義的姿勢への批判が高まる。
  - 1909年7月26日～31日、バルセローナで「悲劇の一週間」
    ※モロッコ植民地問題
  - マウラの辞任

- 1910～1912年、自由党カナレーハスの政権
  - **カタルーニャ県連合体**（マンコムニダー）法案の作成（13年12月に設置）
  - 1912年、アナーキストによって暗殺される。

5. 1910年代～20年代の経済発展と不況

- 大規模な都市化と工業化
- 第一次世界大戦（1914～18）の影響：**中立と戦時ブーム**
  - 戦争特需
  - 輸入代替工業化
  - 貿易収支の黒字
- **戦後不況の開始**
  - インフレと実質給与の低下
- 労働争議と社会的動揺
  - UGT（1888年結成）とCNT（1910年結成）の勢力拡大
  - 1917年8月、全国ゼネスト
  - 1920年、スペイン共産党（PCE)の創立
- 地域ナショナリズム運動の展開
- 1918～1920年、「ボリシェヴィキの三年」

図 6 - 1　第一次大戦前後の経済動向（1913 年＝100 とした指数）



（出所）S. Roldán y J. L. García Delgado, *op. cit.*, vol. 1, p. 203 y Gráfico 5º.

表6-3 貿易収支 (100万ペセータ)

	輸入	輸出	収支
1901	908.3	756.8	−151.4
1902	884.9	813.4	− 71.5
1903	933.7	901.2	− 32.4
1904	920.8	917.3	− 3.4
1905	1,058.4	954.8	−103.6
1906	1,015.1	897.7	−117.3
1907	947.1	943.4	− 3.7
1908	980.9	892.9	− 87.9
1909	956.9	925.4	− 31.4
1910	999.3	970.1	− 29.1
1911	994.5	976.0	− 18.5
1912	1,051.1	1,045.4	− 5.6
1913	1,308.8	1,078.5	−230.3
1914	1,025.5	880.7	−144.8
1915	976.7	1,257.9	281.1
1916	945.9	1,377.6	431.6
1917	735.5	1,324.5	589.0
1918	590.0	1,009.0	418.9
1919	900.2	1,310.6	410.4
1920	1,423.3	1,020.0	−403.3
1921	2,835.9	1,579.6	−1,256.2
1922	2,716.1	1,319.3	−1,396.8

(出所) Instituto Nacional de Estadística, *Comercio exterior de España: números índices (1901–56)*, Madrid, 1958, p. 29, cited in Santiago Roldán J. L. García Delgado, *La formatión de la sociedad capitalista en España, 1914–1920*, vol. 1, p. 25 (2 vols., Madrid, 1973).

表6-7　農業・工業および総生産の推移

(1906〜1930年の平均＝100)

年	農　業	工　業	総生産
1906	84.6	76.1	81.2
1907	80.4	84.2	81.9
1908	82.8	86.1	84.1
1909	97.0	83.2	91.5
1910	85.2	82.3	84.0
1911	105.6	83.1	96.6
1912	72.6	93.4	80.9
1913	86.1	95.1	89.7
1914	104.5	88.6	98.1
1915	96.3	78.0	89.0
1916	105.6	88.9	98.9
1917	110.4	91.6	102.9
1918	101.5	92.0	97.7
1919	99.9	81.9	92.7
1920	109.5	88.8	101.2
1921	102.7	92.6	98.7
1922	101.5	84.7	94.8
1923	114.5	102.5	109.7
1924	98.3	117.9	106.1
1925	119.4	121.1	120.1
1926	98.0	133.7	112.3
1927	127.1	132.8	129.4
1928	89.8	135.6	108.1
1929	129.6	141.9	134.5
1930	99.4	144.0	117.2
1931	101.9	146.1	119.6
1932	129.1	132.8	130.6
1933	122.2	122.1	122.2
1934	127.2	134.4	130.1
1935	113.2	142.4	124.9
1939	87.9	87.7	87.8
1940	75.6	96.0	83.8
1941	90.7	105.2	96.5

(出所)　L. Benavides. *Política económica en la II República española*, Madrid, 1972, p. 268.

6. 王政復古体制の崩壊

- 植民地問題の深刻化
  - 大戦終了後、フランス軍と競って、モロッコでの軍事行動を強める。
    ※1912年にモロッコを保護領化（フランスとのモロッコ分割）
  - モロッコ人正規軍、外人部隊、本土からの応召兵
  - 「アフリカ派」の軍人
  - 1921年7月、**アヌアル**においてモロッコ民族運動軍に大敗北を喫する。
  - 軍人追求の声の高まり／軍隊の反発
- 議会政治への信頼の低下
  - 無投票当選の増加
- カタルーニャでの社会闘争の先鋭化。カタルーニャ・ナショナリズムの急進化
  ※官憲・労働・資本の三者によるテロ行為。首相ダトの暗殺。
  ※1922年、フランセスク・マシアがアスタット・カタラを創設
- 唯一の収拾策としてのクーデタ――憲法によらない統治
  - 1923年9月12日、プリモ・デ・リベーラがカタルーニャに戒厳令を布告。
    ※テロリズム、社会的混乱、**分離主義**を放置した政党・議会を非難。

→プリモ・デ・リベーラが軍政府を組織。

7. プリモ・デ・リベーラの独裁

- 独裁の政治的展開
  –憲法停止、議会の解散、戒厳令の拡大
  –1926年までにモロッコを平定
  -コーポラティブ（職能代表制的）な国家を追求
  –愛国同盟の組織
  -国民会議の設置（27年9月）
  -労資紛争調停委員会

- 1927年、イベリア・アナーキスト連盟（FAI）の創立
- UGTの独裁への協力

- カタルーニャ・ナショナリズムに対する弾圧
  ※カタルーニャ語使用を私的場に限る。
  ※カスティーリャ知識人のカタルーニャ語・カタルーニャ文化の擁護
  →1924年、「カタルーニャ語擁護のカスティーリャ作家の声明」

- 独裁下の経済
  - -「経済ナショナリズム」の強化
  - −積極的な公共投資
  - −1929年、セビーリャ=イベロアメリカ博覧会
  - −1929年、バルセローナ国際internacional博覧会
    - ※Cf. 1888年のバルセローナ万国universal博覧会
  - -赤字財政、通貨危機

8. 独裁の崩壊と王政の廃止

- 1926年、共和主義同盟の結成
- 同年6月24日、聖ヨハネ祭蜂起（サンフアナーダ）
- カタルーニャの反独裁運動の高まり
  - 1926年、マシアがフランスから義勇兵を率いて遠征を目指す。
    →「**カタルーニャ問題**」の重要性をアピール
  - 1929年以後、左派勢力結集の動き
- 1929年1月、軍隊の一部による反独裁蜂起
- 1929年、**通貨危機**
  ※世界恐慌の影響は、31年以後。
- 国王による立憲制復活の画策
  - プリモ・デ・リベーラの辞任
  - ベレンゲール将軍が組閣
- 1930年8月、「**サン・セバスティアン協定**」
- 1931年2月、ベレンゲールの辞任
- 1931年4月12日、全国市町村議会選挙。王政派の勝利。
  ※大都市では革命派の勝利
  →民衆の街頭行動。
  →1931年**4月14日**、各地で**共和政が宣言**される。
  ※カタルーニャでは、マシアが「**イベリア連邦内のカタルーニャ国**」の成立を宣言。